

『アインシュタインの旅行日記：極東・パレスチナ・スペイン 1922-1923』  
編集 ゼエブ・ローゼンクランツ  
プリンストン大学出版 2018

書評者：タダシ・ハマ

過去をよく理解するためには、過去の声を聞かなければならない。しかし、我々が聞くことのできる当事者や目撃者の数は時が経つにつれてどんどん減って行き、ついにはゼロになるのが定めである。現場にいた人々の口頭の説明をじかに聞けば、無味乾燥な歴史の記録が人間味にあふれたものになることは間違いない。一方、遠い過去の記録は、どんなに悲惨なものであれ、どんなに人命を左右するものであれ、忘却の彼方に消えて行き、また間違っって伝えられることが少なくない——現実の出来事を正確に記録しているという信憑性が薄れるのである。むしろ、現場に居合わせた人々が残した記録の方が、おそらくは、歴史を検証する資料としては合理的なものと言えらるだろう。しかし、フェイクニュースおよびイデオロギーによって歪められた記録には深い根がある。歴史的な記録を受け入れる前に、この著者は何が目的で、どんな偏見を抱いているのかを調べてみる必要がある。それをするだけで、その記録が真に価値のあるものかどうかを確認する一助となるだろう。

おそらく、歴史の記録として一番優れたものは、観察された出来事に利害関係や既得権益を持たない人が残した記録であろう——たまたま現場を通り過ぎた旅行者の記録が一番よいということになる。ノーベル賞受賞者であるアルベルト・アインシュタインの旅行日記は、1920年代のアジア、特に軍閥割拠期の中国と大正時代の日本を直接に見聞した人の記録と言えるだろう。アインシュタインは、日本の出版社から、日本全国を回って一連の講演をするようにと依頼されていた。最初の交渉は1921年11月に座礁してしまった。このとき、アインシュタインは「日本人は本当のペテン師だ。彼らがどうなろうと私の知ったことではない」と書いている。日本側は後に新しい条件を提示した。そして1922年3月、アインシュタインは、「今となっては『東アジアの妖しい魅力に抵抗することはできなく』なった」と書いた。アインシュタインはプロの人類学者でも社会学者でもない。それでも、私心のない客観的な目撃者だとは看做すことができるだろう——彼がアジアに関心を持ったのは、第一には講演をしたかったからであり、第二にはアジアのユダヤ人グループの仲間たちに向かって挨拶の言葉を送りたかったからだった。

アインシュタインがアジアへの旅行を思い立つ前に、アジアに対してどのような考えを抱いていたかについては、編集者ゼエブ・ローゼンクランツが書いた、この日記の序文を読めば察しが付く。中国人に関しては、アインシュタインの考えは曖昧にしか捉えられない。1919年にアインシュタインが書いた手紙を見ると、「盗賊団の親玉たちがロシアを略奪した-----その盗賊の大半は中国人であ

る。我々にとっては好先行きが明るくなって来た」と書いてある。ローゼンクランツは、これはアインシュタインの外国嫌いを示す証拠なのではないかと評しているが、ただ、当時の中国が、軍閥の領土の集合であったことと、中央政府というものが全く存在していなかったことを忘れてはならない。したがって、こんな統一性を欠いた中国では、ヨーロッパ諸国の脅威になる可能性は低かったのである。おそらくアインシュタインはこのことを知らなかった。そしてアジア旅行前の考えは反射的なものに過ぎなかった。

ローゼンクランツの言う所によると、アインシュタインは極東という地域を「、小さな家々と小人たち」という当時の西欧の人々が抱いていた先入観に捉われていたとのことであるが、それほどひどい思い込みに陥っていたわけではなさそうだ。たとえば、日本に足を踏み入れる二週間前の記述では、「私の持っている知識からでは、日本がどんな国であるかはまだよく分からない」と言っている。

このノーベル賞受賞者の目には何が見えたのだろうか。1922年11月9日、アインシュタインは、中国に関して、次のようなコメントを書き込んでいる。

貧に喘ぐ人々は、男女を問わず、毎日石を砕いて運搬するという重労働を強いられて、日給はわずか五セントである。中国人は機転の利かない経済活動のために子だくさんに苦しめられている。彼らは鈍感であるがゆえに、そのことに気づいていないのだと私は思う。それを見るのは悲しいことだ。

翌日、彼は妻を伴って、九龍半島を訪れた。

勤勉で、不潔で、無気力な国民なのだ。どの家も同じ作りで、バルコニーは蜂の巣のようだ。建物はみんな密集していて、単調そのものだ。

-----中国人は食事をするとき、椅子には座らず、ヨーロッパ人が森の中でくつろぐ時と同じように、しゃがみこむのである-----

子供たちでさえ、魂が抜けて無気力になっている。中国人が世界を席捲したら、どんなにか悲惨なことになるであろう。-----昨日の夜のことだったが、ポルトガルの中学の教師三人が私を訪ねて来た。なんと、中国人に論理的な思考能力を植え付けようと訓練しても無駄だということだった。特に、数学の才能を全く欠いているというのである。<sup>1</sup>

男も女も同断であることに私は驚いた。中国人女性がいったいどんな抗いがたい魅力を持っているのだろうか。男たちはとことん女に溺れ、そのおかげで、どんどん子供が生まれて来るのだ。

---

<sup>1</sup> 香港でポルトガル人の教師たちが述べた意見とは正反対に、アインシュタインは、1922年11月14日に行った上海での講演で、自分は「中国の若者たちが将来科学に貢献する」ことを信じていると述べた。

1922年11月14日、アインシュタインは「中国人居住区の通りを散歩した」。

---街路はどんどん狭くなって行く。歩行者と人力車の間を縫って歩くのが一苦労だ。空中には得も言われぬ悪臭が漂う。人々は大人しくて、すっかり無気力な様子で、他人からは関心を払ってもらえない。そういう人々が、忌まわしくなるほどの生存競争を戦っているのだ-----。我々は劇場を訪れた。どこへ行っても不思議な匂いがする。馬のように働くだけの存在に墮しても、苦難を意識しているようには見せない。。

その後、アインシュタインはある「非常に面白い村」を訪ねたが、ここは「村中が汚穢と悪臭の中にありながら、極めて陽気な印象を与える所だった。今でも思い出すたびに楽しい気分になる」

六週間にわたって日本中を講演旅行した後、1922年12月31日に、アインシュタインは上海へ戻った。そして、「上海市の近郊」を見るために車で出かけた。

-----中国人は不潔で、苦しんでいて、性格がよくて、落ち着いた優しさをもっていて---また健康である。誰もが中国人を褒めるが、同時に、中国人はビジネスの能力に関しては、知的劣等感を持っていると指摘する。最適な証拠を示そう。中国人はヨーロッパ人と比較すると、同じビジネスに関与しても、十分の一しか儲けられない。さらに、ヨーロッパ人は、ビジネス界の従業員としても、中国人よりも優れている。<sup>2</sup>

アインシュタインは1923年1月5日に香港へ帰り、中国人は「呻きながら」煉瓦を丘に投げ上げているのを目撃したことについてコメントしている。「地球上で一番可哀想な人々だ。残酷に抑圧され、虐待され、畜牛よりもひどい扱いを受けている。つつましやかで、優しく、穏やかさの代償がこれである。

アインシュタインは、それまでヨーロッパで中国人を見た経験がほとんど全くなかった。初めて、彼らが自然に生活している様子を見て、このコメントを残したのだった。戦前の中国について、忌憚のない記録を残している人は他にもいる。例えば、「中国人嫌い」とか「鈍感」とか評されるラルフ・タウンゼンドなどだ。戦前の中国に関するフィクションも残っている。パール・バックの「大地」がその代表だが、この小説は、媚中だという悪評が高い。しかも中国人がそう言うのだ。しかし、アインシュタインの日記を読んでも、他の「中国人嫌い」で「センチメンタル」な人々の著作を見ても、共通した目撃談が語られているからには、

---

<sup>2</sup>それより早く、1922年11月3日、シンガポールに一時滞在した折に、アインシュタインは、「中国人の商人たちは非常な尊敬を勝ち得ている。信用できないという評価の日本人とは大違いだ」と日記に書いている。中国人は「勤勉で、質素で、子供をたくさん作る」がゆえに、「シンガポールはほとんど完全に中国人の手に陥ってしまった」と言うのである。

そのような事実を避けて通るわけには行くまい。実際、戦前の中国は、名前だけは民主国家だとは言っても、その貧困と腐敗の実態は、ここに描かれている通りだったのだ。

人によっては、アインシュタインは日本人から報酬を受け取っていたのだから、日本人のことは褒めるしか仕方がなかったのではないかと疑念を持つこともあろう。しかし、実は、アインシュタインは、日本人が好ましい人種か、それとも腹立たしい連中であるかを決めかねて迷っていたのだった。

アインシュタインは蒸気船北野丸に乗って極東を訪れたのであるが、日本へ向かう航海の途上で、大正天皇の誕生日の式典に遭遇した。アインシュタインは、君が代は「異質な感じでおかしな構成」とコメントした。その後、船中で日本人が余興を演じたとき、アインシュタインは「一人の男が歌を歌ったが、尻尾を踏まれた猫が悲鳴を挙げたように聞こえた」と述べている。さらに、後では「もう一人がまた歌うのを聞いたが、私は気持ちが悪くなってしまった」と書いている。1922年11月17日に神戸に到着した。このときには、日本人は「気取りのない、品のよい、ほんとうに魅力的な」人々であると記している。

日本人の知的能力についてはどう言っているだろう。数週間日本に滞在して講演を行い、学術機関を訪問した後で、アインシュタインは、「日本人に欠けているものを挙げるならば、知的な面よりは芸術的な面の方が問題だ——これが日本人の生来の資質なのだろうか」と書いている。しかし、一方では、アインシュタインは日本についてよく考え、日本の芸術を評価しているのだから、結局は甚だしく日本贖戻だったと言えよう。あるいは、やや中国嫌いの傾向があったのかも知れない。

現在までの所、アインシュタインが即興で語った意見についてどう評価したらよいか、現代のメディアは途方に暮れているようだ。たとえば、アインシュタインに与えたノーベル賞を剥奪せよなどという声は聞かれないし、タイム誌が与えた「20世紀を代表する人物」という評価に異を立てる人もいない。ひょっとすると、アインシュタインのアジアに関する著作は、いわゆる中国嫌いの人々の著作よりも価値があるのかも知れない。人によっては、「価値」を判断するためには、歴史的な正確さよりも主観的な考慮を優先する場合もあるからである。